

公開講演

インド後期仏教石窟と中期密教

——『大日経』と胎藏曼荼羅の成立地及び時期について——

定 金 計 次

はじめに

御紹介頂きました定金です。宜しくお願い致します。私は、大学学部生であった時から、一貫してインド美術を研究して来ました。大学へ入る前は、我国の仏教美術、特に密教美術に興味がありました。大学へ入学した時に、源流であるインドの仏教美術をまず研究対象にするのが、日本の密教美術を研究するためにも、正統なやり方だと思つた訳です。それから、ほぼ五十年になります。その間仏教美術以外のヒンドゥー教美術やジャイナ教美術、或いは中世と近世の写本画（ミニアチュール）等にも研究範囲を広げつつ、殆どインドに留まったままです。但し、時々大学入学前の原点回帰と言うべき仕事もして来ました。今回お話しする内容も、最も新しい研究成果の一つで、インド密教美術と東アジア密教美術を繋ぐものと言えます。

美術史を専門とする者が宗教史の根幹に係わる問題を取り扱うのは、僭越と思われる方がいらつしやるかも知れません。しかしインドは特に古代から中世の早い頃まで、美術資料に比べて歴史に係わる文字資料が少ない国ですから、

正しい美術史の方法でしっかり深く掘り下げて、初めて明らかになる歴史的事実もあると私は考えています。そのような思いに基づいて、本日は美術史の側から、『大日経』と胎藏曼荼羅がインド後期仏教石窟で六世紀末乃至七世紀初に成立したと考えられることについてお話しします。

一 インド後期仏教石窟の成立

五世紀半ばを過ぎた頃、デカン高原の北西部において、後期仏教石窟と呼ばれる石窟群の造営が始まりました。前期仏教石窟は、前一世紀初め頃にインドとローマとの交易が隆盛であったことを背景に成立し、後三世紀になると交易が凋落したことで急速に衰退して、その後小規模な石窟造営が続いたものの、新たな展開がなく、事実上三世紀に前期仏教石窟は終焉を迎えたと考えて良いと思います。後期仏教石窟は、前期石窟を小規模な造営が続いていた時期まで延長した場合、連続した造営活動と捉えることが出来るかも知れませんが、全く異なった条件下に大規模な石窟造営が開始されたと見る必要があります。当時の北西デカンは、最大勢力であったグプタ朝の領域の南に接し、姻戚関係にあったヴァーカータカ朝に支配されていました。

インドの仏教石窟は、僅かに特殊な例外があるものの、前期と後期共に一つの石窟群が基本的に二種類の石窟で構成されています。礼拝対象としてのストウーパを窟内に祀るチャイティア（塔院）窟と出家が生活するため複数の僧房からなるヴィハーラ（僧院）窟です。例外が稀ではありませんが、チャイティア窟は一石窟群に一つ作られるのが通例でした。より詳しく言いますと、前期には礼拝対象としてのストウーパとは性格が異なる高僧の墓に当たるようなストウーパを備えた、変種のチャイティア窟が作られている場合があります。ヴィハーラ窟の規模や数については、言うまでもなく、その石窟群で修行している出家の数に対応していました。一般的に前期と後期のチャイティア窟の違いは、後期が始まるまでに、仏教における礼拝対象として仏像が普及し、後期チャイティア窟のストウーパの前に

は通常仏像が彫刻されていることです。またヴィハーラ窟の違いは、同じく仏像の普及によって、後期ヴィハーラ窟の窟内中央奥に、大抵仏像を祀った仏殿が設けられていることです。

今述べたように、前期と後期の仏教石窟で、チャイティア窟とヴィハーラ窟共に、形式の発達が見られますが、ある面でそれより重要な変化がありました。前期に当たる時期においては、チャイティア窟に限らず、礼拝対象としてのストゥーパは在家の側にあり、ストゥーパの周りやチャイティア窟を飾る彫刻と絵画の主題に特に制限がありませんでした。一方僧院やヴィハーラ窟の装飾については、禁欲を旨とすべき出家の居住空間であるが故に、それに抵触する世俗性の強い主題が禁じられていました。ところが前期の終わり頃に、長い間在家信者の管理下にあったストゥーパ及びチャイティア窟や遅れて礼拝対象となった仏像とそれを祀った祠堂を、総て出家教団が取り込むこととなり、礼拝対象に係わる空間が聖域と看做され、逆に世俗の主題が排除されることになりました。例えば壁画が残る前記窟と後期窟を含むアジャンター石窟の壁画主題を見ると、世俗的場面を多く含む仏教説話は、前期窟ではチャイティア窟に描かれていたのに、後期窟ではヴィハーラ窟に描かれるようになってるのが判ります。説話は在家信者に享受され続けた伝統が確立していたため、建前としては問題があるヴィハーラ窟に移動させたのです。出家の生活の邪魔になるということより、至聖所の莊嚴を重視したと言えます。そして後期のチャイティア窟やヴィハーラ窟仏殿には、極力世俗性を排除した主題が描かれています。換言すると、主題における女人禁制が認められます。⁽¹⁾このような理屈に関して、私より前に考えた人はいないと思いますが、そう考えて初めて筋が通ります。

インドにおいて後期仏教石窟が成立した理由を、私が呈示するまで殆ど具体的に考えられたことはありません。勿論、理由は一つとは限りませんが、私は、インドの北西部にフーナと呼ばれる異民族が侵入し、ガンダーラ地方から中部インドまで移動して来て、中部インド北寄りに位置していたマトゥラーの仏教が大きな打撃を受けたことが、最も大きな原因だと考えています。インドでフーナと呼ばれた民族は、単一ではなかったと思われませんが、世界史で言うと

フン族であり、ヨーロッパに大きな影響があったフン族大移動がインドにも波及していたということです。インド史ではエフタルと呼ばれることがあるものの、ここではフーナとしておきます。

マトウラーは、早くから交通の要衝ではあったものの、仏教にとって活動し難い場所と仏典に記されているように、都市として文化的に高水準でなかったと考えられます。石の彫刻も、私は前一世紀後半から本格的に発達し始めたと思定しています。後一〇〇年頃に新たに成立したクシャーーン朝の勢力が波及し中部インドの支配拠点となると、政治と経済の中心地として文化も栄え、比較的遅く制作が始まった石彫も目覚ましい発展を遂げ、各地に石彫を供給する制作地となりました。宗教も仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教の活動が活発でした。

四世紀を迎えるまでにクシャーーン朝が衰退し、マトウラーにおいては四世紀後半頃に、三一九年に成立したグプタ朝の支配が確立したと見られます。そしてクシャーーン朝が倒れた後に不活発になっていた石彫制作が復活して前代以上に隆盛を極め、仏教彫刻を中心に五世紀半ば少し前に、古代で最も優れた様式と技法を完成させたと言えます。

『法顕伝』と『大唐西域記』におけるマトウラーの記載（大正蔵第五一卷八五九頁上―下、八九〇頁上―下）を比べると、五世紀に大事件が起こったとは思えませんが、彫刻様式完成の少し後にフーナが略奪目的でマトウラーに多く存在した仏教寺院を襲い、先程述べた後期仏教石窟の大規模造営に結び付いて行った訳です。東部インドのサルナート等に逃れた出家も少なくなかったものの、遠く北西デカンへ避難した出家の方が多かったと思います。財物を多く倉庫に貯えていた仏教に比べ、ジャイナ教やヒンドゥー教寺院の被害は小さかったと想像されます。またマトウラーの仏教に関しては、幾つかの部派が活動していたと考えられますが、様々な証拠から説一切有部が特に有力であったと推察し得ます。

序に、フーナの侵入以降のマトウラーの状況に触れておきます。フーナの侵入後は、マトウラーの仏教彫刻制作が停滞したため作例が稀です。ただグプタ紀元一六一年（西暦四八〇年）の在銘像があり、五世紀後半に一部の寺院が

宗教活動を再開していたことが確かめられます。しかし説一切有部に属する主要な出家はアジャンター石窟に移り、他所から名だたる学匠が訪れ滞在することもある、事実上北西デカンが仏教の一大中心地になっていたと考えられます。アジャンター石窟と説一切有部との強い繋がり⁽²⁾は、後期になってから描かれた壁画主題の多くが説一切有部に係わる文献から取られていることから判ります。

二 中期密教について

インド密教は、前期密教（雜部密教）（五世紀頃～七世紀初）、中期密教（七世紀初～八世紀後半）、後期密教（タントラ仏教）（八世紀後半～一二世紀初）と、通常大きく三段階に区分されています。中期密教の段階になって、インド密教は理論・実践の両面で整理されたものとなったと考えられます。中期密教の始まりを代表するのが『大日經』（大正藏第一八卷一頁上―五五頁上、正しくは『大毘盧遮那成佛神變加持經』だが略称を用いる）です。理論面において前期密教の段階と決定的に異なるのが、經典において法身仏が教えを説くという点にあります。具体的には、大日（毘盧遮那）如来と執金剛秘密主との問答の形を取っています。

胎藏曼荼羅、延いては『大日經』が後期仏教石窟、具体的に言えばエローラ仏教窟で成立したのではないかという私の仮説が、殆ど確信に近いところまで来ております。今日まで文献に基づく研究によって、幾つかの説が呈示されているのは承知しているものの、私には検証不可能な面も多々ありますので、取り敢えず文献研究はさて置いて、美術作品から解明出来ることを中心にお話したいと思います。

三 アジャンター石窟における執金剛神の菩薩化

『大日經』や胎藏曼荼羅成立の問題にとつて、前提として最も重要な条件は、説一切有部に重視された、金剛手薬



図1 仏三尊
ニューデリー国立博物館

又と呼ばれた守護神が菩薩化することです。私は、これがアジャンター石窟で起こったと考えて、かつて論文に纏めたことがあります⁽³⁾。その後、更に考察を重ねていますので、今日の話の内容が最新の状態となります。

それ以前に関しては、ガンダーラ地方の仏伝図浮彫において、金剛手薬叉即ちヴァジラパーニが金剛杵を手にして釈迦牟尼（シャキアムニ）に付き従うのがしばしば表されています。また、マトウラーでは、仏三尊像に金剛手薬叉を脇侍とする作例があります。一番有名なもの

は、カニシユカ紀元三二年（最近の説に従うと西暦一五九年）の作であることが判る像で、マトウラーの北西に位置し百キロメートル以上離れているアヒッチャトラという所から出土しました（図1）。私は、マトウラー様式でアヒッチャトラにおいて制作されたと思っています。向かって左、つまり右脇侍がヴァジュラパーニということになります。ガンダーラ地方の影響でしようか、西方の服装をしています。説一切有部を中心に守護神として重視されるようになり、今見て頂いたような金剛手薬叉の状態が、服装をインド化させながらも、後期仏教石窟の造営が始まるまで続いていたと想像されます。但し具体的な作例は殆どありません。

アジャンター石窟において金剛手薬叉が菩薩化する過程を辿ってみます。まず菩薩化する少し前の段階を確認しておきます。壁画の残存量が最も多く、造営もほぼ滞りなく進んだと考えられる、代表的なヴィハール石窟の一つである第十七窟は、五世紀後半に造営され、窟内最奥に仏三尊像が祀られています（図2）。慎重に物事を捉えない人は、説法印の中尊釈迦牟尼には特に問題がないものの、向かって左の右脇侍が観世音菩薩であると考えて、当窟を「大乘



図2 仏三尊像脇侍 アジャンター第17窟仏殿

窟」と考えています。右脇侍が左手に切花の蓮華を執り、頭髮中央の飾りに化仏らしきものが見えますから、そう考へても仕方ないかも知れません。向かって右の左脇侍は、左手に三鈷杵を握ることや、縮れた毛髪を片側に垂らした髪型から見ても、ヤクシャ・守護神としてのヴァジュラパーニであることに疑いありません。ただややこしいことに、頭飾にストウパーに見えなくもない形が認められ、弥勒菩薩の要素が加わっているとも言えます。

しかしながら、やはり問題は右脇侍の方で、私は全く観世音とは看做していません。この時期には漢訳で言うところの観世音は観自在に完全に变化しています。つまり「アヴァローキタスヴァラ」から「アヴァローキテーシユヴァラ」と名前が変わり、姿も変化して装身具を着けない状態なっている筈です。それだけでなく、左脇侍共々頭光がありません。守護神でも頭光が表されることが多く、菩薩ならば頭光がある筈です。研究を遂行する場合、常に現象を厳しく分析することが必要とは思いません。緩やかに捉えなければならぬこともあると思います。けれども今取り上げていることは、厳密に対処しなければ正しい結論が得られないと信じます。

左脇侍が金剛手葉叉であるから、まず当窟は説一切有部と係わりが深く、小乗窟と理解すべきです。窟内外に多く残る壁画主題も、殆どが説一切有部に関係する文献に対応しています。従って小乗の説一切有部が、大乘起源の観世音・観自在を一番重要な至聖所に祀ることはないだろうと感じられます。勿論観世音の成立は早く、既に小乗の出家にも信仰が大いに広まって

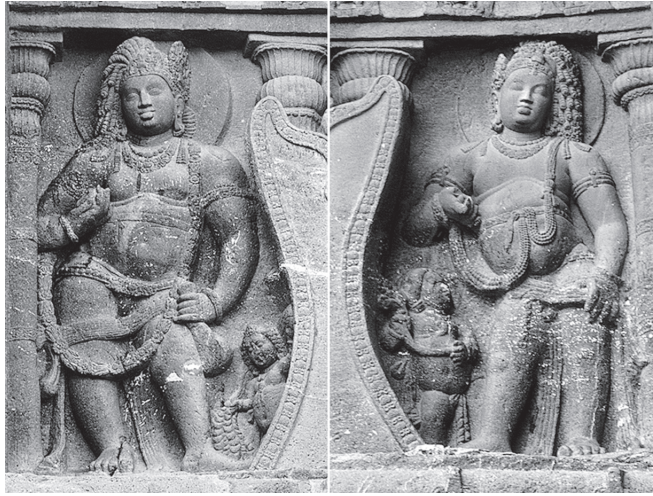


図3 財宝神・金剛手葉叉 アジャンター第19窟正面

います。事実、当窟造営で比較的早く描かれた壁画には、八難救済を伴った観自在菩薩像が、ヴェランダ（我国ではバルコニーの類を誤って「ヴェランダ」と呼ぶことが通例ながら、本来は建物の正面に設けられた屋根付き部分を指す）の一番外寄り端に残っています。言わば「法華経普門品変相」ですから、完全に乗大乗的主題です。小乗の出家にも信仰されていたため、敢えて最も外に近い狭い壁面に描かれたのでしょう。この壁画の観自在菩薩は、頭光が勿論あります。観自在と呼ぶからには、装身具は着けていません。

今挙げた壁画の観自在とそれより後で彫刻された仏殿の観世音めかした右脇侍と一緒に考えると、次の様に解釈するのが妥当と思われる。仏三尊像は、ガンダーラ地方において大乘仏教信者が、クシャーナ朝下に多くの場合弥勒菩薩（未来形で最後の婆羅門青年の姿）と観世音菩薩（王侯青年の姿）を脇侍として、造立し始めたと考えられます。時間が経つに連れて、このような仏三尊像は大乘教徒の間で一般化し、造立し続けられました。マトゥラーでは、三尊像の形式はガンダーラ地方より先に現れましたが、特定の菩薩を脇侍とする構成が一般化しませんでした。先に取り上げたアヒッチャトラー出土仏三尊像の左脇侍については、形式上観世音菩薩と見ることも出来ます。しかしながら頭光がなく、神或いは上流階級の供養者とすべきです。このような組み合わせと比較して、大乘的な仏三尊像は、小乗の出家にも優れた構成



図4 カーシアパ仏・金剛手菩薩・シャーキアムニ仏
アジャンター第19窟正面

に見えたと想像されます。そのような思いが、第十七窟仏殿において、一見して紛らわしい右脇侍を作り出したと私は見えています。見方を変えたと、以下に確認する金剛手薬叉の菩薩化も、このような現象と関係していたと言えます。

さて第十七窟の西隣には、チャイティア窟である第十九窟があります。

五世紀後半乃至末と開鑿時期がやや遅れるものの、寄進者が同じと考えられます。間に第十八窟があるものの、これは第十七窟に附属していて、独立した窟番号を振ってはいけなかったものです。最も早い金剛手菩薩は、第十九窟に現れます。それをお話する前に、正面の明かり取りの窓の左右に彫り出された一対の守護神像を見て頂きます(図3)。向かって左が巾着袋を持った財宝神(福の神)で、側頭部の頭飾に化仏があり、観自在の要素を取り入れています。向かって右は三鉈杵(殆ど欠損している)を手にしているので金剛手薬叉ですが、側頭部の頭飾にストゥーパが彫られている上に、左下の小さな侍者が竜華樹を持っているため、弥勒が重なっています。第十七窟仏殿と同様のことが見られます。

菩薩化した金剛手は、第十九窟正面最上部にあります。最上部の左半分はかなり傷んでいますが、全体に過去七仏と弥勒菩薩が浮彫りされています。各過去仏と弥勒の間には供養者が表されていて、問題の像は、カーシアパ仏と釈迦牟尼仏の間に彫られています(図4)。小像のため細部がは



図5 観自在・金剛手 アジャンター第20窟ヴェランダ

つきりしませんが、頭髮はヤクシャであった時のように、縮れ毛の束を片側に垂らすのでなく、宝髻に結び上げています。また背後に頭光が見られます。更に右手には払子を執り、左手には三鈷杵を握っています。総合的に金剛手菩薩とすることが出来ます。非常に控え目な表現ながら、菩薩化した金剛手の最初の作例と私は捉えています。

このような作例だけで、金剛手菩薩が本当に成立したと言えるのかと、疑問に思われるかも知れません。しかし今後裏付けとなる作例が幾つか出て来ます。第十九窟の西隣第二十窟は、小規模なヴィハーラ窟です。開鑿時期が五世紀末頃で、第十九窟に続くと考えられます。第十七・十九窟と施主が同じと見る人もいます。ヴェランダと外を区切る列柱左右端の壁柱の内側柱頭部分に、各々諸難（画面が小さい上に狭く判り難いが、二つの災難か）救済を伴った観自在菩薩と左手に三鈷杵を執る菩薩形の金剛手が刻まれています（図5）。偶々そうだったのでなく、対で表現したのだと思います。金剛手は姿形から明らかにヤクシャでなく菩薩と考え

えられます。説一切有部は、大乘における菩薩信仰に憧れがあつて、自分達独自の菩薩を造りたいと考え、彼らが一番重要視していた守護神の一つであるヴァジュラパーニを菩薩化したのではないかと私は感じています。この時点で、小乗教徒が礼拝像として祀り得る菩薩は弥勒だけと言えます。前の時代には釈迦菩薩が祀られることがありましたが、



図6 観自在・弥勒 アジャンター第2窟仏殿

この時代にはなくなっています。無論弥勒菩薩の信仰は、大小乗共通です。

ここで話の方向を少し変えます。アジャンター石窟の東端に近くに、第二十窟よりやや遅れて六世紀初めに開かれた第二窟があります。第二十窟より大きなヴィハール窟ですが、第十七窟よりは小規模です。窟内中央奥に仏殿が作られていますが、その手前左右に祠堂が二つ設けられています。珍しい配置です。右祠堂には、ハリーティー（鬼子母神）とパーンチカ夫婦が祀られ、左祠堂にはプールナバドラとマニバドラという親戚関係の財宝神二人が祀られています。前者の夫婦神像は、この後取り上げる別の石窟にも造立されています。ハリーティーとパーンチカに関しては、義浄の訳した『根本説一切有部毘奈耶雜事』に詳しく記述されていますので（大正蔵第二四卷三六〇頁下―三

六三頁中）、第二窟も説一切有部の出家が止住したと見られます。ところが至聖所である仏殿には、弥勒（現在形でトウシタ天にいる神の姿）と観自在（修行者の姿を脇侍とする仏三尊像が祀られています（図6）。クシャーン朝下における姿形と異なり、装身具を着けるのが観世音から弥勒に交替しています。アジャンター石窟において、これが至聖所に大乘の菩薩が祀られている殆ど唯一の例外と言えます。当窟は、明らかに大乘窟とすることが可能です。しかしながら、鬼子母神夫婦像を基準とすれば、小乗窟となります。大乘の出家であっても小乗部派の律に従って修行生活を送るという、当時の出家の状況を踏まえると、当窟は、説一切有部の律を守りながら、大乘思想の勉強に勤しむ出家が住んだと解釈すべきです。私は、アジャンター石窟に

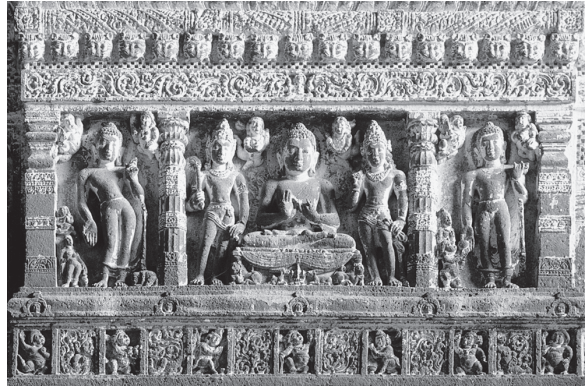


図7 仏三尊 アジャンター第26窟右列柱台輪

おいて六世紀になって大乘思想について研鑽を積む出家が増えて来て、このような現象が生じたと考えています。

至聖所或いはその近くに大乘的主題を採用するのは、北西デカンではアジャンター第二窟仏殿が嚆矢と言えます。但し、中部インド西端に位置し五世紀後半に造営されたバグ石窟において、ヴィハーラ窟ながら仏殿にストゥーパを祀った第二窟では、仏殿入口左右に高浮雕により観自在・弥勒が守門として表されています。至聖所近くに大乘系菩薩を造像した例外的に早い彫刻作例として、挙げておきたいと思います。

このように、石窟寺院に限らず大乘思想の展開が小乗思想を凌ぐようになり、小乗律を遵守して修行する出家でも大乘思想を学ぶ者が多くなって、大乘系仏三尊像が普及し始めたと思われます。その一方で小乗律に替わって大乘独自の「大乘戒」を制定しようとする動きも、既に発生していたと考えられます。けれどもチベット仏教を見れば判るように、その後も依然として出家の資格を保証するのは小乗律であり続け、インドにおいて大乘戒が取って代わることはなかったと見られます。

今述べた第二窟の東隣に第一窟が開鑿されている頃、ヴァーカータカ朝は終焉を迎えつつありました。六世紀半ばまでに同王朝が滅亡し、替わってアジャンター石窟より南のアシユマカ地方を本拠地とする政権の支配が及んだと考えられます。アジャンター石窟でも西端に開かれた第二十一窟以降の窟は、総てアシユマカの地方政権下に造営されたと見られます。西端近くに開かれたチャイティア窟である第二十六窟は、規模が大きく一部未完成ながら、この地

方政権の大臣による資金的援助を得た僧が造営したことが寄進銘によつて判ります⁽⁴⁾。既にチャイティア窟が存在するにも拘わらず、新たに礼拝堂を造つたのは、西群の石窟で出家が纏まつて活動していたのかも知れません。しかし彫刻主題から、より早く造営された窟との繋がりが窺えます。即ち、更に展開した金剛手菩薩を第二十六窟内に見るものと出来ます。右列柱上台輪の一部に、弥勒と思しき右脇侍と共に、仏三尊像の左脇侍として浮彫りされています(図7)。両菩薩の形は殆ど同じで、腰帯の結び目に当てた左手に三鈷杵を握っているか否かで区別されます。このような状態は今後も続きます。ここで確認しておきたいのは、弥勒と変わらぬ姿形から、金剛手が明らかに菩薩として表現されているということです。

もう一つ指摘しておきたいことがあります。僅かな点ながら、ストウパ前部に彫られた仏像の上左右に見られる飛天浮彫に重大な変化が見られることです。前に指摘したように、チャイティア窟やヴィハーラ窟仏殿は、主題上女人禁制であつた筈ながら、アジャンター石窟西群においては、飛天が各々ミトゥナ(二対の男女)になつていきます。それまでは、通常男性侏儒(差別用語と看做し得るが、簡潔な代替語がなく、止むを得ず使用)の飛天でした。これを契機として、以降は至聖所に積極的に女性像を導入する動きが強まります。言うまでもなくヒンドゥー教の宗教理論から始まり、仏教も取り入れたタントリズムによる現象と言うことが出来ます。

四 ガートトカチャ石窟ヴィハーラ窟仏殿本尊について

アジャンター石窟に距離が近いものの、非常に行き難いガートトカチャ石窟という遺跡があります。私は二度訪れました。言語を絶する程大量の蝙蝠とゴキブリが窟内に住み着き、全く閉口しました。この石窟は、複数の窟を造営するつもりだつたようですが、規模の大きなヴィハーラ窟だけが使用出来る状態になつたようです。但し、未完成に終わった箇所が少なく、時間を置いて付け加えられた彫刻もあります。窟外のヴェランダ左端に寄進銘が残り、

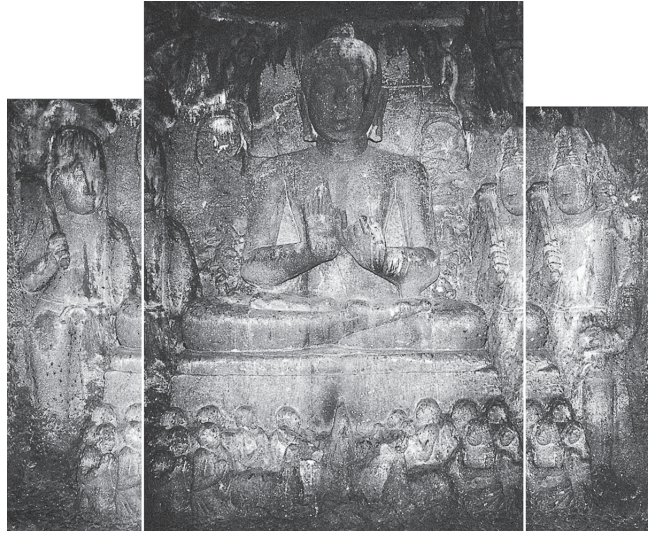


図8 仏三尊 ガトートカチャ石窟ヴィハール窟仏殿

アジャンター第十六窟を寄進したのと同じ、ヴァーカータカ朝ハリシェーナ王に仕えた大臣ヴァラーハデーヴァが施主となって造営したと記されています⁽⁵⁾。岩に刻まれた寄進銘の文字は、アジャンター第十六窟の銘に比べて不明瞭で、読み方を疑問視する研究者もいます。私は、それについては何とも言えません。ただ、こちらもヴァラーハデーヴァの寄進とすると、アジャンター第十六窟の中断時期があった造営も含めて、かなり複雑な状況を想定する必要があります⁽⁶⁾。

一応仮に、いずれも同一人物寄進と認めて複雑な状況を具体的に想定し、結論を単純化して述べます。当窟は、ヴァーカータカ朝が滅亡する少し前に開鑿が始まり、ヴァーカータカ朝下に開かれた主要ヴィハール窟と同様或いはそれ以上の規模を備えているものの、窟内の形式がアシユマカ地方政権下に造営されたアジャンター石窟西群のヴィハール窟にかなり近い状態になっています。窟内奥中央の仏殿には初転法輪の姿をした釈迦牟尼が祀られています^(図8)。三尊像の形式で、右脇侍に傷みがあり判然としない箇所が多いものの、左脇侍が左手で三鉈杵を執り、姿形から金剛手菩薩であることが明らかで、右脇侍が観自在である可能性が充分あります。不明瞭な箇所が多いながら、観自在の姿として特に矛盾が見られません。そして、中尊台座の下に初転法輪に係わる法輪と鹿及び五人の修行者に

加えて複数の供養者が彫刻されています。

後期仏教石窟ヴィハーラ窟仏殿において、複数の供養者が表されるのは、ヴァーカータカ朝が減じる少し前頃からですから、中尊台座下の彫刻は造営当初と見て間違いないでしょう。中尊も様式的に六世紀半ば近い前半の作として問題ありません。しかし観自在と金剛手菩薩が脇侍というのは、造営時の作と看做すと早過ぎると思えます。彫刻様式も中尊とは明らかに異なります。当初の造営が放棄され、時間を置いてから加えられたと考えるのが妥当です。それならば両脇侍が何時頃追加されたのかという問題が出て来る訳ですが、彫り方が鈍くてはつきりしません。話が進んでから、後程改めて取り上げます。

五 アウランガーバード石窟における金剛手菩薩の展開および観自在・金剛手による脇侍菩薩の成立

次にアウランガーバード石窟を取り上げます。アウランガーバードは、ムガル朝のアウラングゼーブがデカンのムスリム勢力を征服する際の基地になったのが名の由来です。現在では、アジャンター・エローラ観光のためのホテルが殆どこの町にあります。同石窟は、町の北背後の丘陵に造営された仏教石窟です。

アジャンター石窟については玄奘が『大唐西域記』に伝聞を記載しているけれども、実際には行っていません（大正蔵第五一卷九三五頁中）。アジャンター石窟では、六世紀半ばを過ぎると、北からカラチュリ朝という王朝が北西デカンに勢力を拡大し、そのためアシュマカ地方政権が減び、大規模な造営活動が終息します。それと同時に多くの窟が造られたことから、一部で崖崩れが起こるようになったのではないかと考えています。『大唐西域記』の記載が伝説めいているのは、玄奘がインドにいた七世紀前半に既に廢墟に近い状態だったのかも知れません。或いは、更なる宗教的展開に対応する窟を造営する場所的余裕がなく、アジャンター石窟が捨てられたとも想像出来ます。

アウランガーバード石窟は、アシユマカ地方政権下に造営が始まったと見られます。やや距離が離れた西群と東群からなります。石窟開鑿は西群においてチャイティア窟である第四窟から始まり、ヴィハーラ窟の第三窟（窟番号は西群・東群全体としての通し番号）そして第一窟（窟外の造営がほぼ完了しているが、窟内は初期段階で放棄）が続いたと考えられます。アジャンター第二十六窟の造営と連続していたことが、第三窟の柱の装飾が一部酷似していることから判ります。アジャンター石窟西群でも、未完成に終わったヴィハーラ窟が存在しますので、やはりアジャンター石窟において、政権交代や宗教的な展開以外の、造営が続け難い別の条件が生じたのは確実なように思えます。その後カラチュリ朝の支配になって、アウランガーバード石窟西群の第一窟が大きく未完成のままになり、東群の造営が開始すると共に、西群でも小規模の窟が造営されました。なお東群の西端には、ガネーシヤを中心に祀り、女神像や仏坐像も彫刻された番号のない窟があります。窟の性格が良く判らないので、特に取り上げないでおきます。

ここで大きな疑問を呈示しておきたいと思います。後期仏教石窟に関して、ヴァーカータカ朝下及びアシユマカ地方政権下の造営は、寄進銘がある程度残され資金の出所が判ります。しかしながら、今話しているカラチュリ朝下以降の仏教石窟造営については、かなり大規模な開鑿が最終段階まで実施されているにも拘わらず、如何なる資金調達がなされたか全く判りません。寄進に係わる碑文が残らないからではありませんが、時期的に直接岩に刻む代わりに銅板文書にしたと仮定しても、実際全く見付かっていません。そもそも仏教に寄進するような政権が、近隣にあったとは考え難いのです。或いは何らかの方法で、仏教教団が大金を貯えていたのでしょうか。

さてアウランガーバード石窟で、彫刻の主題が多彩になったことが良く判るのが東群第七窟で、彫刻の様式と技法もカラチュリ朝の南進によって齎された特色がはっきりと認められます。話の本筋から離れますので、詳細は省略しますが、窟内には説一切有部との強い繋がりを示す鬼子母神夫婦像が祀られている一方で、大乗的な六波羅蜜の人格化と思われる女神像も祀られています。それだけに留まりません。仏殿の手前には二重の入口があり、初めの入口左



図9 彌勒・金剛手菩薩 アウランガーバード第6窟仏殿入口左右

右には、観自在（八難救済を伴う）・彌勒が配され、その奥にある仏殿自体の入口左右には、侍者を伴った女神が量感豊かに彫刻されています。更に仏殿内右壁には、恐らく観自在と妃ターラー（後期仏教石窟における初例）と見られる夫婦像が祀られ、左壁には本尊仏倚像を奏樂舞踊により供養する七人の女神が表現されています。つまり至聖所に八

人の女神が彫刻されています。直ぐ前の入口左右も含めると、女神の数は十四人になります。かつての状態と比べると、タントリズムに基づく造像が極端とも言える発展を遂げているのを目の当たりにし得ます。

第七窟において、菩薩の中で観自在が早くにターラー（女性救済者）を配偶者とするようになりました。ターラーは、既に五世紀後半乃至末に単独礼拝像としてサールナートで造立されています（コールカーター・インド博物館蔵）。その後、性格が似通った観自在と夫婦になったと思われる。他でもなく観自在が配偶者を得た最初の菩薩である理由は、最も人気があったことに加えて、名前が苦行者でありながら性との結び付きが強かったヒンドゥー教シヴァと関係していたからだと思われます。

少々脇道に入ってしまったましたが、金剛手菩薩に関して特に取り上げないといけないのが、東群西端近くにある第六窟です。造営時期は第七窟とほぼ同じですが、やや早い



図10 仏三尊 アウランガーバード第5窟仏殿

かも知れません。この窟において北西デカンで初めて守門に高浮雕による菩薩像が採用され、しかも弥勒と金剛手菩薩の組み合わせです(図9)。金剛手菩薩が等身大以上の大きさで初めて造立されたことも特筆すべきです。既に触れたバード第二窟では、百年程前に高浮雕で守門の菩薩像が現れていますが、北西デカンにおいて、これより前のアジヤンター石窟に残る守門は総て壁画で、しかも弥勒菩薩の可能性が高い、第十一窟左守門を除いて菩薩の守門はありません。世間一般にずっと「守門菩薩」として扱われて来た第一窟で最も有名な壁画は、頭光もなく菩薩とし得る標幟も全く見られません。「守門神」とすべきです。世界的規模で、研究者達が長年に互り頗るいい加減であったということです。

アウランガーバード石窟東群の造営は、第六窟と第七窟以降も続きました。時間が進むに連れて、ヴィハーラ窟における出家の住房が少なくなる傾向が認められます。

私は、この現象を「ヴィハーラ窟の祠堂化」と呼んでいます。東群における開鑿は、第九窟から更に東に進展しようとした頃、カラチュリ朝が北に撤退し、特に第九窟は未完成に終わりました。それより前、西群東端に位置する第五窟において、画期的とも言える仏三尊像が造立されています(図10)。西群には空いた場所が殆どなく、当窟は高所

に造られ、祠堂つまり仏殿だけで構成されています。後期仏教石窟で禪定印の仏坐像を中尊とする三尊像は非常に少なく、その中でこの像が一番早く制作されたと思われます。そして右脇侍が観自在、左脇侍が金剛手です。勿論頭光も備わり、姿形から菩薩として造られたことが確かです。様式から見て、三尊同時の作です。仏三尊像の脇侍の組み合わせとして、かなり早い作例です。

先に取り上げたガトートカチャ石窟の脇侍を思い出して下さい。比較すると似ていることが判ります。恐らく第五窟が開かれた頃、ガトートカチャ石窟において説法印坐仏の左右に、脇侍像が遅れて彫り出されたと思われます。不完全な状態で銘が刻まれ寄進されたガトートカチャ石窟ヴィハラ窟は、出家が止住し活動していて、仏殿に脇侍を造立するまでに整備が進んだと考えられます。アジャンター石窟とアウランガーバード石窟及びエローラ仏教窟にいた出家と大局的に同じ教団に属していたと見られます。ただ現在と同様に距離が近くても行き難い場所にあり、他石窟の出家と交流がままならず、更なる整備がなされることなく、ガトートカチャ石窟は放棄されたと推察されます。

本題に戻ります。私は、アウランガーバード第五窟本尊を胎藏大日如來の三尊像と考えています。恐らく、インドにおける大日如來の最古の作例になるかと思っています。この窟は東南東向きで、中尊が胎藏大日としても、方位が合致せず、胎藏曼荼羅は未成立だと思われます。既に法身仏の考え方は確立していますので、『大日経』の中心をなすような仏と菩薩が具体的に考えられていたと見ることが出来ます。特に、經典ではヴァジラパーニの方が活躍する訳ですけれども、胎藏曼荼羅を見てわかるように、金剛手と観自在の対菩薩が大きな役割を担っています。後の更なる発展の具体的な出発点が、この三尊像だと思っています。なお、金剛手と観自在の仏三尊像における位置関係は、例外が少数あるものの、金剛手に関してヤクシヤの段階や弥勒と対になる場合も含めて、アジャンター石窟以来今後も通常左脇侍で、観自在は弥勒と対になる場合でも、右脇侍になることが多いと言えます。守門の場合も同様です。

このような新しい仏三尊像が造立された背景と理由について、私は次のように考えています。説一切有部の律に従



図11 仏三尊 アウランガーバード第2窟前庭左壁

いつつ大乘思想に関して研鑽を重ねていた出家達は、既に仏教とヒンドゥー教の石窟の開鑿が始まっていたエローラ石窟において、シヴァを最高神として祀るヒンドゥー教の在り方に改めて刺激を受けたのではないかと思います。そして大きく変革する社会において信者との繋がりを強めるために、法身仏を中心とする新しい經典を編纂すると共に、新しい仏菩薩の体系を構築しようと考えたのではないかと想像します。それに続いて、宗教儀礼としてプージャー（供養）主体であった仏教に初めてヤジユニャ（供儀）的要素を加え、既に成立していた前期密教を受容し、マンダラを用いた修法を導入して、未発達の部分が多く、十分な信仰を獲得していなかった前期密教の弱点を克服し、仏教の在り方を正式に刷新する動きを始めたということになります。

アウランガーバード石窟に話を戻します。第五窟の仏三尊像に続いて、東群でこれより早くに造営された第二窟に残る浮彫を取り上げます。この窟は、やや小規模ながらチャイティア窟である第四窟等と同じく低い位置に造られ、第五窟より先に開鑿されたと見られます。前庭左壁に、かなり風化し細部が半ば以上不明瞭になりつつ、左脇侍が金剛手菩薩である仏三尊像が残っています（図11）。右脇侍の形は全く判りません。ただ中尊は、風化しながらも

腕の形態から手印が禪定印であったと考えられます。第五窟と同一構成の可能性が高いことになります。台座の形が複雑になっている点や、比較的状态が良い金剛手の肉付けが平板なことから、私は第五窟の三尊像より若干遅れると見ています。その捉え方が正しいとすれば、アウランガーバード石窟に止住した出家集団の間で胎蔵大日如来が成立し、信仰が高まりつつあったと言えます。

六 エローラ仏教窟における金剛手菩薩の展開および文殊菩薩の成立と前期密教の発展

エローラ仏教窟における金剛手菩薩に関する展開を、次に取り上げます。彫刻様式に着目すると、エローラ仏教窟はアウランガーバード第六・七窟より遅れ、第五窟より早く造営が始まったと思われます。

エローラ石窟は、仏教・ヒンドゥー教・ジャйна教の三宗教の石窟で構成されています。インドでも稀なことです。仏教窟とヒンドゥー教窟は、カラチュリ朝支配下に造営が始まり中世前期まで続きました。ジャйна教窟は、中世になつてから開かれました。いずれも主要な窟は、南北に連なる丘陵の西斜面に開鑿されましたが、南北端では丘陵が西に方向を変えているため、南に集合している仏教窟と北に集まっているジャйна教窟の一部は、正面が北向き或いは南向きになっています。主要ヒンドゥー教窟は、仏教窟とジャйна教窟に挟まれて丘陵西斜面の広い空間に造営されています。その中央に位置するのが、石窟寺院でなく岩石寺院であるカイラーサナータ寺です。岩石寺院とは、切り石を積み上げて造立した石積寺院と同じような建築物を岩石の固まりから彫り出したものを言います。エローラ石窟には、ジャйна教窟群にも岩石寺院があります。ヒンドゥー教窟としては、丘陵西斜面より東に小振りの窟からなる石窟群もあり、主要窟付近に小窟が造られている場合もあります。また仏教窟の北端は第十五窟で、ヒンドゥー教窟に作り変えられています。本来仏教窟として造営され始めた窟です。その南には、一つのヒンドゥー教窟（第十四窟）が割り込んだ形になっています。比較的早くカラチュリ朝下に造られた窟で、最も南のヒンドゥー教窟になり

ます。第十五窟は、既にあつた第十四窟を避けて、その北で開鑿され始めたのです。

さて仏教窟の第一窟から第五窟までは東西に連なっています。第六窟以降が丘陵西斜面に位置します。第一窟はヴィハーラ窟ながら、全く彫刻が残らず未完成で、開かれた時期も判然としません。第二窟から第五窟までもヴィハーラ窟で、総てに彫刻が見られます。窟によつては積年の汚れのため、彫刻の彫りが鈍く見え、様式分析が難しい場合もありますが、総じてカラチュリ朝が北から持ち込んだ様式が確認出来ます。エローラ仏教窟の中でも早い時期の造営と見られるので、アウランガーバード第六・七窟が造営されてから、エローラ仏教窟が着手されたと考えられます。多分アウランガーバード石窟に多くの出家を収容出来ないことが予想されたので、規模の大きい窟が造り得るエローラ石窟の地に仏教石窟の中心が移ったと思います。

エローラ第五窟までの彫刻主題を見ますと、後からの追刻像も少なくないため、しっかり造営当初の作か否かを見極める必要がありますが、菩薩の組み合わせについては、観自在・弥勒しか確認出来ません。つまりエローラ仏教窟の初期段階で、菩薩に関しては保守的と見ることが出来ます。既に見たようにアウランガーバード第六窟において、今取り上げている比較的早期のエローラ仏教窟より前の時期に金剛手菩薩が守門として登場していますし、アウランガーバード第五窟等には、カラチュリ朝が北西デカンから撤退するまでに、観自在と金剛手を脇侍菩薩とする禪定印仏三尊像が造られていて、アウランガーバード石窟に止住していた出家が思想的に革新的であつたと看做すことが出来ます。後程確認するように、エローラ仏教窟では、カラチュリ朝が北に戻るまでに金剛手菩薩が具体的に姿を現すだけでなく、アウランガーバード石窟に見られなかった主題も登場して、ある面遅れを取り戻すことになります。

今述べたことに基づいて捉え方を厳しくすると、アウランガーバード石窟とエローラ仏教窟で活動した教団が別であつたことが可能です。しかしながら、より巨視的に眺めるとアジャンター石窟以降の説一切有部教団における思想的展開の多様性と解釈する方が実際に近いように私は感じています。厳格な見方から出て来た結果が正しいか

も知れないけれども、主題的に収束したと言えるエローラ仏教窟のカラチュリ朝撤退後の具体的状況を顧慮すると、やはり一つの流れの中で緩やかに把握する立場を取りたいと思います。

エローラ第五窟は、丘陵が北に曲がる位置にある窟で、カラチュリ朝下に開かれたヴィハール窟としては、最大の規模を持っています。間口に比して奥行きが深く、床に奥に向かって続く二筋の長い直方体状の隆起が造られています。これは、大勢の出家が腰掛に使ったのでしょうか。もしかすると食事をする際には卓として使用したのかも知れません。アウランガーバード石窟では、このようなヴィハール窟が見られず、アジヤンター後期石窟以来、時間がかなり経過して、ヴィハール窟が用途に応じた形態を発達させていたことが判ります。なお同種のヴィハール窟として、カンヘーリ石窟の第十一窟が挙げられます。

少し脇道に逸れましたが、本題に戻ります。第五窟の北のやや高い場所に造営された第六窟は、カラチュリ朝下に開かれた窟の中で、彫刻主題に関して最も重要な窟です。また複数の彫刻家が制作したため、出来栄えに差が見られるものの、エローラ仏教窟の中で最も優れた彫像がこの窟に見られます。僧房も設けられてはいますが、尊像を祀った祠堂の性格が強い窟です。仏殿前室の後壁に刻まれた守門は、伝統的な観自在・弥勒で、取り分け右守門の弥勒はエローラ仏教窟における最高傑作としても過言ではありません。左守門の観自在は、作行きがかなり落ちます。仏像の出来が良いとか悪いとか、不敬と言えそうですが、美術史の立場からの評価なので、お許し下さい。前室左右壁には、ブリクティイー（顰蹙、既に信仰されていたターラーより遅れて成立したもう一人の観自在妃）とマハーマーユリー（偉大なる孔雀守護女神、コブラの害から守ってくれると信じられた、天敵孔雀を主題とする呪文の神格化）が刻まれています（図12）。どちらも前期密教の段階で成立した女神です。

マハーマーユリーは、義浄訳『根本説一切有部毘奈耶葉事』には欠けていますが、チベット訳では末尾に詳細な記載があり、エローラ仏教窟において説一切有部との強い関係がアジヤンター後期石窟以来続いていた証拠の一つと



図12 ブリクティー・マハーマーユリー
エローラ第6窟仏殿前室左右壁

看做せます。『根本説一切有部毘奈耶』については、漢訳の元となった原典がチベット訳のそれと違っていたと見られます。マハーマーユリーに係わる文章が義浄訳の原典にあったかどうかは不明ながら、チベット訳にある以上、説一切有部との関係は動かないと思います。なお別に義浄訳『佛説大孔雀呪王經』（大正藏第一九卷四五頁上―四七六頁上）が残っています。

当該像は、乳房があつて女神であることが明白です。しかしながら、性別に厳格でない東アジアでは、マハーマーユリー本来の性格を表す「ヴィディアーラージュニー」(vidyārājñī, 「呪文の女王」つまり呪文を指す「ヴィディアー」は女性名詞なので「最高の呪文」という意味)というサンスクリット語を、原語が異なるにも拘らず不動明王・降三世明王等の明王 (vidyārājñī, 「呪文に呼び出され仏敵を懲らしめる戦士の王」と同じく「明王」と訳してしまつたため、男性である明王に分類された挙げ句、国宝に指定された平安時代の仏画(東京国立博物館蔵)や北宋仏画の仁和寺蔵国宝孔雀明王像が、一方女性らしく描かれている仏画もあるものの、博物館・美術館の学芸員で、仏教美術を専門としながら、このような伝統的誤解を継承している方が多いのは極めて遺憾です。



図 1 3 観自在・文殊・弥勒 エローラ第 6 窟仏殿右壁最下部

序に触れておきますと、インドにはマハーユーリーの絵画資料も残っています。一乃至一二世紀に東部インドで書写された椰子葉彩飾經典写本の中に入れられた写本画として、複数の作例が確認出来ます。

マハーユーリーやブリクティーが仏殿前室に彫刻されている点は、正にタントリズムに基づく現象であると同時に、教団が明らかに前期密教を受容していたと言えます。但し、前期密教そのものが、どのような出家の間で発達したのか、美術史の立場からははっきりしたことが判りません。エローラ第 6 窟に現存最古のマハーユーリー像が残る事実には漢訳仏典等の文献資料も加えて、今後考えてみたいと思います。

ブリクティーは、ターラーより遅れて観自在と関係付けられた女神で、ターラーが観自在でなく観世音であった時期の救済者たる性格と繋がっているのに対して、観自在になってからの苦行者の性格と関係し、装身具を着けない女性修行者の姿に表されています。この後、各地で左右にターラーとブリクティーを従えた観自在菩薩像が造られるようになりました。仏殿に入ると右壁の最下部に、横に並んだ三軀の坐像が高浮雕で造立されています(図 13)。向かって左が観自在で右が弥勒であることは、持物と頭部に付けられた標幟から明らかなです。問題なのは、中央に表された像を如何に比定するかです。かなりの肥満体に表され、頭髮を三つの房に分け、左手に椰子葉写本(貝多羅・梵篋)を、そして右手には球状の物体(吉



図14 龕状祠堂（左壁・正面） エローラ第8窟

祥果、ビルヴァの果実？）を持っています。私は、少年固有の髪形から、太った体軀について幼児の肥満と見ました。更に持物に基づき、幼児形の文殊菩薩、所謂「稚児文殊」と解釈しました。⁽⁸⁾ インドやアメリカの研究者は、財宝神の「ジャンバラ」としましたが、完全な間違いです。⁽⁹⁾ 多分正しく比定したのは、私が初めてだろうと思います。ガンダーラ地方における三尊像脇侍として、この像より制作時期が早い可能性がある文殊の作例があります。しかし、現存作例としては孤立しています。一方、今取り上げている像は、現存作例に関する限り、今後文殊像が大きく展開して行く出発点に当たります。肥満体の幼児にしたのは、仏典に出る「クマラーブータ」（「永遠に若い」という意味で、「法王子」とする漢訳は正しくない）の状態を具体的に示していると思われる。但し、あまり時間を置かずに、もつと上の年齢ながら、ギリギリ少年である十六歳位で表現されるようになります。⁽¹⁰⁾ また今取り上げている三菩薩に、金剛手菩薩が加わった四菩薩が、今後インド仏教における主要四菩薩として、一二〇三年にイスラム教徒によってヴィクラマシーラの僧院が焼き討ちされて、事実上インド仏教が終焉を迎える時まで信仰が続くこととなります。

これに直ぐ続く状況が、第六窟の下やや北寄りに開かれた第八窟に見ることが出来ます。入口の左外壁に鬼子母神夫婦像が彫刻され、説一切有部との関係が確かめられます。当窟は、主となる仏殿より早く、窟入口正面奥の壁

に、私が「龕状祠堂」と呼ぶ空間が形成され、その後、入り口を入れて右奥に正式な仏殿が造られました。龕状祠堂と仏殿のいずれも、祀られている彫刻に新たな主題や形式が認められますが、金剛手菩薩が仏三尊像の左脇侍となっている龕状祠堂を先に取り上げます。前に二本柱があって、正面に仏三尊像を中心に複数の像を配置すると共に、左壁の前には、別個に観自在とターラーが祀られています（図14）。

三尊像右脇侍が弥勒で、正面から見ると判り難いものの、右手持物は明らかに竜華樹の枝です。金剛手は右手でやや複雑な形の三鉈杵（向かって左部分が欠損）を横にして握り、左手は腰帶の結び目に置いています。以前は初期作例を除いて、総て腰帶の結び目に置いた左手に三鉈杵を握っていました。左手を腰帶結び目に置いている両脇侍共に、右手に必須とも言える払子でなく固有の持物を執る初例と見られます。

もう一点重要なのは、仏三尊像背後の壁左端上寄りに、小像ながらエローラ仏教窟における、もう一体の稚児文殊像が彫り出されていることです。左手に梵篋を持ち、右手は右膝に置いています。三尊像上部の飛天が、苦行者の姿をしているのは珍しいと言えます。

左壁の前に高浮雕で造立された観自在とターラーは、単純化しながらも量感があり、アウランガバード第七窟の彫刻様式を良く継承しています。カラチュリ朝がまだ十分に勢力を保持していた頃に造られたことを示唆しています。観自在は、左手で触れる蓮華の形式でもアウランガバード第七窟左守門の観自在と繋がりが認められます。この龕状祠堂が、未だ観自在・金剛手の脇侍が成立していない時期に造られたため、彫刻の配置や構成が変則的であったと考えられます。

入口を入れて右奥に遅れて設けられた仏殿は比較的小さく、周囲に遶道を備えています。仏殿正面の手前右壁には第六窟のマハーマユリーと同じ構成で、やや単純化された浮彫画面が残ります。稚児文殊と同じく、第六窟との連続性が確認出来ます。ただ仏殿入口の守門と内部の脇侍が観自在・弥勒になっていて、完全に重複しています。慎



図15 ナーシク第20窟内部

重な構成では、少なくとも観自在の重複を避ける傾向が、この後にも認められます。但し、仏殿内の脇侍は伝統に従い右手に払子を執っているものの、観自在は四臂（同時代の作で他に、アウランガーバード第九窟未完成涅槃像の足近くに彫られた像とカンヘーリ第四十一窟右祠堂仏三尊右脇侍の十一面を持つ像の二例がある）に表され、多臂化の始まりを示しています。更に観自在向かって左にターラーが、弥勒向かって右にブリクティが配されています。弥勒と無関係なブリクティですが、均衡の取れた配置にするためだと思われます。両女神が同じ空間に現れた初例です。ここにも、仏教尊像の急速な発展が確かめられます。

七 ナーシク石窟における金剛手・観自在 による脇侍菩薩の成立

エローラ石窟の話が続ける前に、ナーシク石窟における金剛手と観自在の脇侍を取り上げます。アウランガーバード石窟におけるより早い作例と考えられます。ナーシク石窟は二十数窟からなる比較的大きな石窟群です。後一世紀初め頃、サータヴァーハナ朝支配下に開鑿され始め、途中フーナよりもっと早くにインドにやって来た異民族であるサカ族に支配され、また再びサータヴァーハナ朝が取り戻すという混乱がありました。そのような動きが寄進銘によって判ります。ナーシク石窟は、一世紀から二世紀に開かれた前期仏教石窟ですから、仏像が祀られることはありませんでした。ただ主要ヴィハーラ窟内では、後壁中央にストゥーパを浮彫で表し札押出来るようになってい



図16 弥勒・観自在 ナーシク第20窟仏殿前室

て、後期ヴィハーラ窟に仏殿が形成される以前の先駆的な現象が認められます。その後六世紀になって、各所に仏像を祀る空間が様々な形で造られました。但し、このような動きは、独立した窟を新たに造営するものではなく、アジヤンター石窟のような前期と後期の石窟が併存する状態とは異なります。

取り上げるのは、チャイティア窟である第十八窟の左上方に、二世紀初開かれたヴィハーラ窟の第二十窟です。窟内奥やや右寄り床の一部が正方形に近い低い壇状に削り残されています（図15）。私はこれを戒壇と看做し、当窟が受戒を行う中心的なヴィハーラ窟であったと考えています。重要な窟なのに中心が右にずれているのは、既にあったチャイティア窟を避ける必要があったからだだと思います。

仏教石窟で戒壇と判るものは殆どありませんが、複数石窟群の総称であるジュンナル石窟のガネーシャ・レーナ群のヴィハーラ窟（恐らく内部後壁中央にあったストウパー浮彫がガネーシャに改刻され、現在ヒンドゥー教寺院になっている）に同様の床の出っ張りが見られます。右下にチャイティア窟（ナーシク石窟と違い、ヴィハーラ窟と同時代の造営）があることも含め、様々な点で両方のヴィハーラ窟が近い関係にあったことが窺えます。

第二十窟においては、六世紀後半に最も規模が大きい礼拝空間として、窟内後壁中央より少し右に前室を備えた仏殿が新たに形成されました。それより前は窟内後壁に僧房入口が並んでいて、勿論四百年以上後の改修を予定している筈がないのに、前に列柱がある複雑な空間を極めて巧みに造り上げ



図17 仏三尊 ナーシク第20窟仏殿

ています。元の状態を復元するのはかなりの難問です。ただ当窟は重要なヴィハール窟であったため、窟内後壁には房室の入口が並んでいただけでなく、中央やや右寄りに他の主要ヴィハール窟と同じく比較的大きなストウーパ浮彫があり、そこだけ房室が造られなかったとすれば、問題が解決出来ます。

前室の守門は、他石窟の場合と異なり、どちらも苦行者の姿の観自在(向かって右)と弥勒です(図16)。宝髻に付けられた化仏とストウーパの標幟及び観自在が左手を触れる蓮華によって区別出来ますが、不思議なことに弥勒が手を触れている植物の茎は、上の方で途切れ花と葉が全く刻まれていません。現状からは、竜華樹の花と葉を絵で表現したとしか考えられません。彫刻家が何故こんな手抜きをしたか不可解です。

守門菩薩が刻まれた後、それ程時間を置かずに仏殿の仏三尊像が造立されたと見られます(図17)。中尊は説法印倚像で釈迦牟尼です。左脇侍持物の彫りが曖昧で判り難いのですが、腰帯結び目に置いた左手に三鉈杵が辛うじて確認出来るので、金剛手菩薩です。右脇侍が観自在で、恐らく金剛手・観自在を脇侍とする仏三尊像としては、後期仏教石窟で一番早いと考えられます。ただ様式は、カラチュリ朝下の特色を示しながらも、アウランガーバード石窟や

エローラ石窟の彫刻様式とは異なります。六世紀後半でもやや遅くに様式が伝わり、地域性も加わったと見られます。細かなことを言いますが、中尊と左脇侍は同じ彫刻家の作と認められるけれども、観自在は顔がやや面長で、体軀や四肢に比べ頭部が過大で、彫り手が異なることが明らかです。前二者より少し後の作である可能性があるものの、かなり時間を置いて制作されたとは考え難く、様式差は三尊が一具として造立されたと看做し得る範囲内にあります。この後六世紀末になって、両菩薩の対が別の祠堂でも現れますから、第二十窟仏殿三尊を、観自在・金剛手の初例とし得ると考えます。

しかしナーシク石窟では、禪定印坐仏を中尊とし観自在・金剛手を脇侍とする三尊像は見られません。西海岸に近いカンヘーリ石窟も、金剛手（ヤクシャと菩薩の両表現がある）を含む同時代の彫刻が多数残されているにも拘わらず、中期密教との強い関係は認められません。アジャンター・アウランガーバード・エローラ石窟から離れた後期石窟では、宗教的展開の仕方や教団の在り方が確実に異なっていたと推察出来ます。

玄奘はナーシク石窟のことを『大唐西域記』で記述しているけれど、殆ど無視しています（大正蔵第五一卷九三五頁中）。観自在菩薩像が信仰されているとだけ記されています。つまり玄奘は、金剛手菩薩やそれを含む密教を認められなかったことが明白です。その直後にアジャンター石窟の伝聞が記録されています。記載しながら、敢えて行かなかったのは、見たくないものがあると直感したのかも知れません。

八 エローラ第十一窟と中期密教の成立

— 第十窟との比較による第十一窟造営時期の解明及び東アジアにおける受容を含めて —

本題に戻って、カラチュリ朝下エローラ仏教窟におけるチャイティア窟である第十窟を取り上げます。後期仏教石窟全体として、最後のチャイティア窟と言われています。窟内奥のストウパー前面に観自在と弥勒を脇侍とする仏三



図 1 8 列柱装飾 エローラ第 1 1 窟上階・第 10 窟身廊

尊像が刻まれています。彫刻はカラチュリ朝が北から持ち込んだ様式を良く示しているので、当窟の開鑿がエローラ仏教窟で比較的早かったことが判ります。天井が高い窟のため、今ある場所が選ばれた筈です。しかし二階にバルコニーが設けられ構造が複雑で、造営が順調に進まなかったようです。

ここで重要なのが、身廊と側廊を隔てている列柱の浮彫装飾です。これが当時流行した文様で、サンチャーにおいて同時代の第十八祠堂柱にも採用されています。エローラ石窟には腕の良い職人がいたようで、文様を繊細かつ正確に彫り出しています。

第十窟は、浮彫も多く、一部未完成に終わったと見られます。

ただ第十窟が造営中であつた、いずれかの時点で、その北に新形式三層構造のヴィハーラ窟である第十一窟の建設が計画され、実際に造営が始まったと考えられます。石窟寺院は、木造や煉瓦造の建築と異なり、上から下へ手前から奥へと工事が進むため、現状に基づき初期段階、即ち上階前寄りの列柱が完成し、続いて中央奥に前室付き仏殿及び本尊仏三尊像、更に仏殿に至る三重の列柱（一部未着手）が造られ、同時に中階・下階前面の列柱が浮彫装飾を除いて彫り出されて、建設が中止されたと推察されます。

上階最前列柱は、八角柱である第十窟の列柱と異なり太い四角

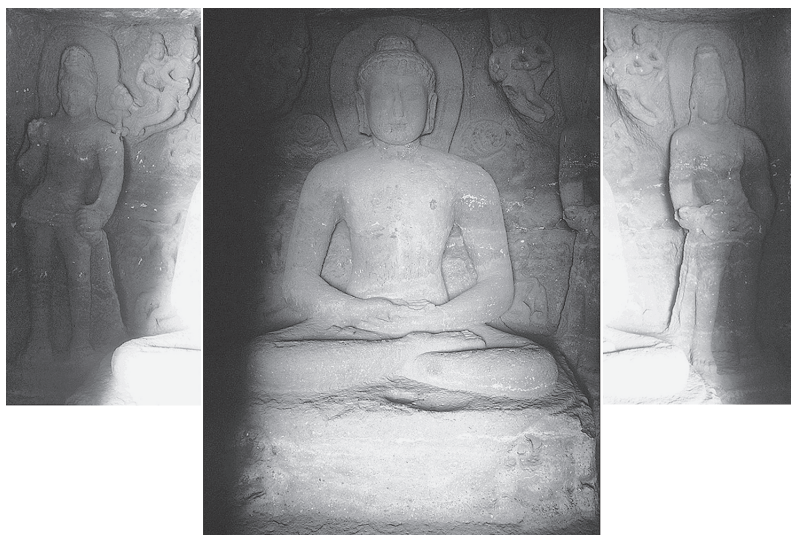


図19 仏三尊 エローラ第11窟下階中央祠堂

柱のため、主文様に対する四弁花文の数が違うものの、同種の文様が同じく精細に刻出され、両窟の造営が連続していたことを示唆しています(図18)。第十一窟の造営が放棄された理由は、恐らくカラチュリ朝の撤退と考えられます。エローラ石窟は、それ程時間を置かず南の前期西チャールキア朝の支配下に入ったと思われます。同王朝が仏教に不寛容でなかったため、当地の仏教は発展を続けられたと想像出来ます。そしてアウランガーバード石窟において序の口辺りで止まってしまった中期密教成立への動きが加速進展したと、私は考えています。その根拠になるのは、未完成のまま放棄された第十一窟の各所に、仏教の変革に応じて形成された祠堂が認められるからです。

中期密教成立に係わる教団の動向を窺うには、それぞれの祠堂内に造立された彫刻の様式を見極め、制作順に整理して行く作業が必要です。当窟は、前面が既に形成されているため、造営中止後に関して、上から下に工事が進んだと考える必要は全くありません。まず注目されるのは、下階中央に開かれた祠堂です。装飾はないものの入口枠が何重にも形成され、きちんとした祠堂を造ろうとしたことが

判ります。かつて当窟は、北隣第十二窟の「ティン・タール」(三階建て)に対して「ドーン・タール」(二階建て)と呼ばれ、当該祠堂は土と瓦礫に埋まっていた。ここにアウランガーバード第五窟と同じ構成の三尊像が祀られています(図19)。中尊が同じ禪定印ながら、観自在と金剛手は各右手に払子を執らず、エローラ第八窟龕状祠堂の両菩薩の形態を模倣しています。彫刻様式は、インドの場合、如来像より菩薩像が概して把握し易く、カラチュリ朝下の名残が、ある程度豊かな量感と減り張りが肉付けに確認出来ます。アウランガーバード第五窟より新しいが、続いて取り上げる当窟の彫刻よりは古く、六〇〇年頃の制作と見られます。この祠堂の造立によって、当地において『大日経』が本格的に編纂され始めていたと推察されます。

中尊の頭髮は未だ「髮髻冠」にはなっていませんが、編纂が終わるまでに、そのような頭髮が考案されたのでしょうか。「髮髻冠」は、法身仏を区別するための形式ながら、手印が同じ阿弥陀(無量光・無量寿)仏と差別化する意味があったのかも知れません。「現図胎藏曼荼羅」においては、それでも不充分と看做されたのか、阿弥陀仏は、変種の禪定印である「妙觀察智印」(力端印)を取っています。そして、この祠堂は西向きで、仏三尊像の配置に基づいて、胎藏曼荼羅における方位が成立したことが窺えます。私は、他所では起り得ないことと考えています。

今取り上げた祠堂が造られている頃は、仏教そのものの変革期であると同時に、釈迦牟尼像の形式が大きく変化する時期でもありました。複数の条件が関係していると考えられますが、主な理由は、主たる仏蹟の内、成道地であるボード・ガヤーが特に重要視されるようになり、他の手印の像も造立されたものの、触地印(降魔印)坐像が釈迦牟尼像の基本形式になりました。成道地を訪れた玄奘は、信仰を集めていた触地印坐像が宝冠や装飾を加えて飾り立てられていたことを記しています(大正蔵第五一卷九一六頁中)。このような動きはボード・ガヤーから始まったと見られ、その後宝冠や装身具で飾られたブッダ像が制作されるようになりました。中期密教において大日如来が宝冠を戴き装身具を着けた姿に行き着くのも、成道地で生じた現象を一つの前提にしていると考えられます。エローラ仏教窟にお



図20 仏三尊・六大菩薩 エローラ第11窟中階左祠堂

いても、この後造られた如来像は、特殊な場合を除いて総て触地印坐像になったと言えます。また当地を支配する政権が前期西チャールキア朝に替わって時間が経ったことで、彫像の形式や様式に南インドの特色が強くなっています。例えば下半身を覆う衣が短くなり、身体の量感が減殺されている点等です。

第十一窟中階中央の左右に、下階中央祠堂における禪定印仏三尊像から百年位遅れ、相前後してほぼ同じ構成の二つの祠堂が開かれました。いずれも触地印釈迦牟尼坐像と観自在・金剛手からなる仏三尊像を本尊とし、その手前左右壁に各三菩薩立像が祀られています(図20)。脇侍菩薩の方が左右壁の六菩薩像より大きいけれども、合わせて「八大菩薩」と呼ばれる『大日経』と深く係わる菩薩群を形成しています。既に同経は編纂が終わり確実に成立していて、それを受けて二祠堂が造営されたと考えられます。八大菩薩とは、既に彫刻としてエローラ仏教窟で造立されていた観自在・金剛手・弥勒・文殊に虚空蔵・地藏・普賢・除蓋障を加えたものです。弥勒と文殊は、持物や標幟で容易に見分けられます。それぞれ奥寄りの観自在と金剛手に近い場所にいます。残りの四菩薩をどれに当てるかについては、厳しい意味で不明と言うべきです。けれども、我国では一仮説が定説化しています。後で具体的に触れます。なお、中世に入ると観自在は宝冠を戴くことがないものの、他菩薩と同様に装身具を着けるようになります。

した。ここでも、それが見られます。

第十一窟中階の右祠堂と左祠堂の違いは、前者において本尊台座下左前に地神が彫り出されているものの、右に「アパラージター」（無能勝）が見られない点と、後者内部前壁に、ターラーと財宝神ジャンバラが高浮彫で造立されていることです。アパラージターは、遅くとも三世紀にマトウラーで成立し、タントリズムと関連して信仰が高まつた、ヒンドゥー教のドウルガー女神を仏教が受容したものです。加えて後者の入口装飾が複雑で、明らかに後者の造営が遅いと考えられます。しかし基本構成に大差ない二祠堂が相前後して近い場所に開かれた点は不可解です。アパラージター及びターラーと財宝神が至聖所に加えられつつあった時点で、それらを欠いた構成が不完全で許容出来ないとされたのでしょうか。

この後、エローラ仏教窟でも、また他地域の中期密教関係の寺院でも、女神と財宝神が仏殿内に祀られることが多くなるので、左祠堂の構成はその嚆矢と捉えることが出来ます。それに劣らず重要なのが、触地印仏坐像に地神だけでなくアパラージターが加わったことです。成道説話の中に魔衆を退治する勇敢な女神が導入されたのは、五世紀後半乃至末頃制作のサルナート出土仏伝図浮彫に見られるのが早い作例なので、その頃と考えられます。仏教では、通常アパラージターの名で呼ばれています。

玄奘は、『大唐西域記』において魔衆の襲来を告げると同時に彼らを懲らしめる女神を含めて成道説話を丁寧に説明しながら、この女神を第一の地神として地神が二人いたことにしています（大正蔵第五二巻九一六頁上―中）。ヒンドゥー教から導入された女神なんか認めたくないで、当時流布していた説話を完全に歪曲したと思われる。

八大菩薩像が揃った、これら二祠堂が造営された時点で、胎藏曼荼羅も既に成立していたと私は考えています。そうだとすれば、本尊として大日如来が祀られるべきかも知れません。しかし後期密教の時代は、仏像の安置状態が判る寺院が殆ど残らず、不明と言わざるを得ませんが、中期密教の寺院は、中心となる仏堂・仏殿において本尊として



図21 仏三尊・八大菩薩 エローラ第12窟上階仏殿

釈迦牟尼像を安置するのが決まりでした。仏教の展開に従って新しいブッダが生み出され、造形化され祠堂に祀られたとしても、その祠堂は寺院としての纏まりの中で、中心とはならない空間であったと言えます。アウランガーバード第五窟もこのエローラ第十一窟も、大日如来が祀られている祠堂は、ある面実験的に造られ、主たる礼拝所ではないと看做せます。中階二祠堂は、寺院として充分な規模と構造を備えたものが新たに造られる前に、新しい信仰の中心をなす至聖所として取り敢えず造営されたと考えられます。

第十一窟において不規則な祠堂の形成が続き、空間としてやや手狭になり、八世紀前半に同じく三層構造の第十二窟が北隣に造営されました。上階がほぼ完成した状態で、下に行く程、第十一窟程ではないものの、未完成部分や計画が縮小された箇所が多くなっています。上階において、伝統的な過去七仏が等身大で二組祀られている一方で、前期密教から中期密教にかけて成立した一二体の女神が仏殿前室に祀られています。非常に密教色の強いものです。仏殿内の構成は、前壁のターラーとジャンバラ（いずれも坐像で配置が左右逆になっている）を含めて、第十一窟中階左祠堂とほぼ同様です。しかしながら、左右壁前に高浮雕で造立された菩薩像は、二体増えて八体になっています（図21）。脇侍とは別に観自在・金剛手を加えて八大菩薩を同じ大きさで揃えたのか、或いは全く違う二菩薩を追加したのか、はっきりしません。なお中階仏殿内も、類似の構成になっています。仏殿内は、二十年以上前に彫刻と壁・天井が洗浄されて、彫刻が総て彩色で覆われ、壁と天井が余す所な

く壁画で荘嚴されていた状態が良く判るようになりました。宗教に関係なく、古来このような状態が寺院の普通の姿だったのです。

さて私は、第十二篇が『大日経』に係わる宗教行事を行う場として造営され、最初に完成した上階において実際にマンダラを使用した修法が行われたと考えています。仏殿本尊の触地印仏坐像は、礼拝者からすると東の方向にあります。言うまでもなく降魔成道の釈迦牟尼ですが、後程詳しく説明するように、成立時の胎藏曼荼羅では、東方の宝幢如来が同じ姿形に表されていたと考えられます。第十一窟諸祠堂における仏像安置の状況が、マンダラ構成上の根幹に組み込まれた結果の一つと見られます。私が『大日経』と胎藏曼荼羅の成立地をエローラ石窟と考える大きな理由です。

胎藏曼荼羅に関して、中国に伝わって以降の展開を辿り得る資料が我国に伝承されています。(胎藏図像)・(胎藏旧図様)・「現図胎藏曼荼羅」です。前二者はいずれも円珍請来本を転写したものが残り、後者は空海請来本を元にした多くの作例が現存しています。いずれにおいても非常に沢山の仏菩薩や天部等が描かれ、マンダラは、基本的に方位を定めて壇上に描くのが決まりながら、胎藏曼荼羅については描くべき像が多過ぎて、水平の壇に描くのが難しくなると推量出来ます。「現図胎藏曼荼羅」は、通例掛幅形式で、マンダラであるからには無論方位が定められつつ、最外院において懸垂すれば上部となる東に天界の梵天等を、また下方となる西中央に地神の象徴たる壺が描かれています。明らかに方位と同時に上下関係もあり二重の基準が認められます。この点を(胎藏図像)においても確かめたく思いましたが、転写本下巻では、最外院に含まれる守護神等の画像がマンダラの配置通りには描かれておらず、はつきりしませんでした。

ただ私は、このような構成が東アジアにおいて生じたのではなく、既にインドで成立していたと見ています。密教絵画のもう一つの重要な形式であり、懸垂して用いる修法用布絵(バタ)の状態のマンダラが、一方で正式な砂絵マン



図22 仏八大菩薩方陣
エローラ第12窟下階後廊左後壁

ダラが今でも描かれているチベットで早くから描かれていたことから、そう考えて良いと思っています。或いは前期密教の段階で、マンダラのパタ化が始まっていたのかも知れません。第十二窟上階の空間は、正に大画面の胎藏曼荼羅を掛けて修法を行うのに相応しい空間と捉えられます。私は、仏殿本尊とマンダラ中心部の東方仏が響き合う状態であったと思っています。

序にアパンラージターに関して触れておきますと、三種のマンダラの内〈胎藏圖像〉にだけ見られません。但し、現在欠損している下巻の巻頭部分に描かれていたと思われます。加えて〈胎藏旧図様〉・「現図胎藏曼荼羅」において、各々のアパンラージターがインドにおける姿形を良く継承していることも指摘しておきます。

さて第十二窟は、当初計画を簡略化させながら造営が下階まで進み、僅かに未完成部分を残しながら、八世紀半ばまでにはほぼ完成したと考えられます。途中から並行して、北側に間口がやや狭い第十五窟の開鑿が始まったと見られます。恐らく同様に三層になる予定だったのでしょう。上階の最前列柱に裝飾文様と共に小仏坐像が刻まれているので、仏教窟として造営され始めたことが明らかです。しかし早い段階で造営が中断し、あまり時間を置かずヒンドゥー教窟に改変されました。碑文が残る当地が新たに仏教に寛容でなかったラシュートラークタ朝の支配を受けたことが判ります。第十二窟の完成がある意味で急がれたのも、不穏な政治状況が原因と思われるます。

ラッシュアウト朝の支配が確立されるまでに、エローラ仏教窟では長期間に亘って空いた壁面等に、大小の追刻像が多数制作されました。その中で特筆すべきは、第十窟バルコニー右後壁と第十二窟中階仏殿前室右壁柱に刻まれた金剛界大日如来像と第十二窟にだけ五例認められる、私が「仏八大菩薩方陣」と呼んでいる浮彫画面です。言うまでもなく前者は、エローラ仏教窟が寺院としての役割を終えるまでに、他所で『金剛頂經』（正しくは『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』だが略称を用いる）が成立し、中期密教の新しい動きが当地にも及んだことを示しています。後者は、画面が三列三段の九区画に分けられ、中央区画に禪定印仏三尊像、そして周囲八区画に八大菩薩が配されていて、簡略版胎藏曼荼羅と捉えることが出来ます（図22）。仮に早くからパタ化したマンダラが制作されていたとしても、方位に基づく壁や柱に追刻されたものを無批判にマンダラすると話が混乱するので、私は「方陣」と呼んでいます。比較的大きい下階後廊左後壁の浮彫でも各菩薩の持物は判然としないものの、仔細に観察すると第十一窟中階二祠堂内の菩薩像の配置と強い連関があることが判ります。

これと関係すると見られるのが、不空訳『八大菩薩曼荼羅經』（大正蔵第二〇巻六七五頁上―六七六頁上）という仏典です。そこではマンダラと言いながら、前後左右で菩薩の位置を記述しています。菩薩の位置に関する記載の一箇所には矛盾があり、それを修正すると第十一窟中階二祠堂内の配置と一致します。菩薩の持物は殆ど合致していませんが、修正した位置関係で尊名を仮定すると、「方陣」及び祠堂・仏殿内の菩薩配置において、持物・標幟によって比定に問題がない観自在・金剛手・弥勒・文殊が正しいことになり、その他の四菩薩の尊名も決められるという理屈になります。先に定説化した仮説があると言ったのは、このような考え方です。⁽¹⁾厳密には、そもそも文献と彫刻が完全に一致している訳ではないので、基本四菩薩がうまく当て嵌まったから、他も正しいとはならない筈です。例えば、文献の位置を修正して除蓋障に比定されている像は、珍しく文献とも合致する「幢幡」を持っています。けれども「現図胎藏曼荼羅」において「幢幡」は地藏の持物となっていて、依然未解決とすべきです。しかし文献と浮彫作例共に、



図23 胎藏大日三尊 ラトナギリ寺院址第4祠堂

方位を強調しないマンダラが見られるということは、エローラ仏教窟で用いられた本格的胎藏大曼荼羅がパタ化していた可能性が高いとする考え方を補強し得ます。

九 オーディシャーへの伝播

エローラ仏教窟で起こったことが、中国に『大日経』を伝えた善無畏(六三七〜七三五年、七一六年に長安に至る)の故郷であるオーディシャー(かつて「オリッサ」と呼ばれていた)地方に早く伝わりました。エローラ第十二窟の造営より前です。パウマカラ朝という王朝下で、同地方の中央を流れるマハーナディー河より北のブラフマニー河の下流域に、中期密教に係わる複数の寺院が栄えたことが発掘によって判っています。『宋高僧伝』に、善無畏は同王朝王族の出自で、一時王位にあったこと等が記されています(大正蔵第五〇巻七一四頁中―七二六頁上)。この地方を取り上げるのは、エローラ仏教窟において観察出来なかった、『大日経』に関係する美術の成熟した形が当地の寺院址で確認することが出来るからです。そして義浄がインド往来を果たした頃から確立した海路によって、少なくとも晩唐期まで、当地の中期密教美術が絶え間なく中国に齎され、それを受容した我国の密教美術とも深



図 2 5 胎蔵大日如来
ナーランダー考古博物館



図 2 4 胎蔵大日如来・八大菩薩
ラトナギリ考古博物館

い繋がりが認められることも理由の一つです。

最も早くに当地で大規模な学術的発掘調査が行われたのが、ラトナギリ遺跡です。形式に制約が多い石窟寺院と異なり、石や煉瓦を使って寺院を建設したので、建物の構造と機能の関係が判り易いと言えます。密教が行われた寺院でも、出家が修行しながら居住すると同時に、礼拝像を祀るための仏殿（本尊は釈迦牟尼）を備えた僧院と共に、伝統的な礼拝対象であるストゥーパが築かれています。また中期密教の信仰を良く反映した祠堂も見られます。ここには僧院が二つあって、主たる第一僧院は少なくとも二階建て以上であったのが判ります。

仏殿本尊は触地印坐仏と観自在・金剛手の三尊で、中世になるとブツダ像を大きく造る傾向が強まり、ナーランダーでは化粧漆喰を施した塑造（ストゥッコ）により大きな仏像を制作していますが、この地域では、切り石を積み上げて大きくする、当地固有の方法が採用されています。エローラ仏教窟と同じく、観自在は装身具を着けています。また同様に財宝神を重視する傾向も継承されています。当地ではエローラ仏教窟では見られなかつ

た、稻穂を持った女性の財宝神であるヴァスダーラーが目立つ場所に安置されていました。

ラトナギリ寺院址の一角に、第四祠堂という番号が振られた東向きのレンガ積みの狭いお堂があります。奥壁前に本尊として胎藏大日を安置し、左右壁前に金剛手（右手に金剛杵、左手に金剛鈴を持っているため、金剛薩埵と呼ぶ方がよい）と観自在（左手を持った未敷蓮華の花弁を右手で広げようとする）が祀られています（図23）。大日は、頭部を髪髻冠に表しながら装身具も着けています。菩薩像の位置がエローラ仏教窟の場合と逆になっていますが、祠堂の向きが反対なので方位は合致し、『大日経』の根幹を具体化した祠堂と言えます。但し両菩薩像は、金剛界曼荼羅に関係する新しい姿形をしています。（五部心観）が善無畏関係の絵画作例であることから判るように、当地には『大日経』より遅れて成立した『金剛頂経』と金剛界曼荼羅に係わる図像も、比較的早くに伝わっていたことが確かです。しかしながら、金剛界大日の彫像が現れるのは、もっと後になります。

ラトナギリ遺跡からは、今挙げた像の他に胎藏大日として、本格的な発掘が行われる前に得られた坐像が近くの小学校にあり、第五祠堂址から左右に八大菩薩の小像を加えた像が発掘により出土しています（図24）。また同様に八大菩薩の小像を従えた触地印釈迦牟尼坐像も掘り出されています。

密教に係わる寺院として早くから発掘が実施されたナーランダーでは、恐らく念持仏して造られた胎藏大日の小像が一体だけ確認出来ます（図25）。ナーランダーから出土した出家の念持仏は、ブロンズ製が多いものの、この像は石製で入念に制作されています。数例残る金剛界大日に比べると作例が極めて少なく、ナーランダーでは『大日経』の思想はあまり普及しなかったと推察されます。後で成立した『金剛頂経』が主となり、金剛乗の密教が更に展開したことが明らかです。それと関連して、次の点を指摘しておきます。即ち、エローラ仏教窟において確立した観自在・金剛手の仏三尊像脇侍が他地域にも受容されたものの、ナーランダーを中心とする東部インドの寺院では、観自在・弥勒の脇侍が長く継承される傾向にありました。仏・八大菩薩が並列して祠堂入口の楣石に表された場合も、中



図26 金剛界大日如来
ウダヤギリ第1遺跡第1僧院仏殿

心の仏の左右には観自在と弥勒が配されています。『金剛頂経』の成立以降、金剛手・金剛薩埵の地位上昇が加速し「原初仏」まで上り詰める動きが、一旦捨てられ掛けた古い組み合わせを延命させたと思われることが出来ます。

ラトナギリ遺跡の近くにウダヤギリ遺跡があります。ラトナギリの後で発掘された所です。複数の寺院址が存在し、丘の麓に造営され最も西寄りの第一

遺跡と呼ばれている寺院址がまず発掘されました。規模が大きくないものの、中期密教との関係では最も重要な道路に近い東寄りの第二遺跡は、比較的最近まで発掘が続けられていました。第一遺跡の寺院は、背後に丘がある関係で東向きです。まず興味深いのは、主僧院の南東に小振りのストゥーパがあり、発掘後に復元的修復がなされ、四方の龕に塔本四仏が祀られています。四仏の一つが方位と係わらない胎藏大日（ラトナギリと異なり装身具を着けない）なので、その点も問題になりますが、ここでは東の触地印仏に注目します。空海請来「現図胎藏曼荼羅」では触地印が鼓音如来の印相となり問題が更に複雑化しますが、エローラム教窟において指摘したように、触地印を取るのが本来宝幢如来であったことが、善無畏が直接係わった〈胎藏図像〉の転写本から明らかです。ここでもそう捉えるべきです。胎藏曼荼羅の四仏の手印が〈胎藏図像〉の後、〈胎藏旧図様〉と「現図胎藏曼荼羅」で変化したのは、思想的に発達していた『金剛頂経』に基づく金剛界曼荼羅における四仏の手印を優先し、早く成立していた胎藏曼荼羅の方が手印を変えたからだと思います。

日本の密教研究者は、「現図胎藏曼荼羅」に基づき、大日以外を金剛界三仏と考え、「金胎不二」思想の現れと看做

しています¹²⁾。しかし、これは中国で胎藏・金剛が完全に組み合わせられてから出て来た筈です。我国は、中期密教が今も信仰されていて資料も豊富なため、インドの中期密教を研究するのに有利な立場にあります。けれども、東アジアで成立した事象を無批判にインドに適用することは間違いです。ウダヤギリ第一遺跡から金剛界大日の石像(図26)が出土し、現在第一僧院仏殿本尊向かって左に安置されていますが、当地域には「金胎不二」説が成立するような『金剛頂経』に係わる信仰が高まった形跡が全くありません¹³⁾。

今話したことに関係して、少し脱線します。『大日経』の成立地をエローラ仏教窟と考えている私は、『金剛頂経』について特に深く考えていませんでした。差し障りがあるので詳細は省きますが、オーディシャー州の西隣であるチャッティスガル州のシルプルを『金剛頂経』成立候補地にする考えもあるようです。私も何度か調査に足を運びましたが、当地と似た状況しか認められず、その考えが間違っていると確信しています。私自身は最近、前から考えていたナーランダーで成立したという思いが強まっています。理由の一つは、僧院(西向き)の列の西側に南北一列に並ぶ大小の仏堂・祠堂、及び離れて造営された仏堂・祠堂の総てがエローラ仏教窟と反対に東向きとなっている寺院構成が、胎藏曼荼羅と逆になる金剛界曼荼羅の方位と呼応する点です。尤も仏教において東向きのお堂は、西向き程珍しくはありません。勿論今は全く思い付きの段階で、今後複数の難しい条件を克服する必要があります。

ところで、塔本四仏を改めて(胎藏図像)(図27)と比べてみて、私は最近まで鵜呑みにしていた第一遺跡ストゥーパの復元を疑うようになりました。遅れて発掘された第二遺跡は、報告書が二冊出版されているのに、第一遺跡の発掘に関しては、報告書の出版が確認出来ません。偶々見付けた発掘開始前後の写真により、宝幢仏と阿弥陀仏が今と同じ方角にあったことが明らかですが、南と北が不明です。¹⁴⁾ストゥーパの近くで原位置不明のまま発掘された想像されます。傷みや汚れが目立つ宝幢仏と阿弥陀仏に比べ、これら二仏の状態が良いのも、長く土中に埋まっていたことを物語っています。現在の復元は、我国の一部の研究者と同じく、胎藏大日以外の三仏を誤って金剛界系と考



図 2 7 胎藏五仏 胎藏図像上巻 奈良国立博物館



図 2 8 鼓音（北）・阿弥陀（西）・胎藏大日（南）・宝幢（東）
塔本四仏（方位修正） ウダヤギリ第 1 遺跡ストゥーパ

え、与願印が金剛界では宝生仏の手印になるため、それに当たる仏像を南に配し、残る北に胎藏大日を当てたのではないかと思います。一旦疑いが生じると、大日を北に配置していることに、私は違和感を持ち始めました。今南に安置されている仏の姿が、〈胎藏図像〉の開敷王仏と合致しないのも、勿論理由の一つです。そして南北の仏を入れ替えると、北が与願印の鼓音仏となり〈胎藏図像〉に描かれた姿と合うのです。脇侍が八大菩薩になっているので、そこから四仏本来の配置を考察しようと試みたものの、八大菩薩全体を貫く配置基準が見付かりませんでした。しかし南北の仏は入れ替えるべきだと信じます(図28)。

四仏の内では、阿弥陀仏が特別扱いを受けていて、光背が他と違い円花文(彫り手が実際に意図したのは法輪文か)で縁取られた拳身光です。阿弥陀を何故重視したのか、その理由についても改めて穿鑿する必要があります。加えて阿弥陀仏に関しては、脇侍を金剛手・観自在と見る説があります⁽¹⁵⁾。そうだとすると特別視が更に強まりますが、慎重に観察すると、右脇侍が花(蒼)の束を持物とし、観自在でないことが判ります。正しくは、私が考える鼓音仏の左脇侍が観自在です。四仏の各脇侍については、片方(左脇侍及び右脇侍の場合各二)が主要四菩薩のいずれかになっていて、その点で釣り合いが取れています。仮に阿弥陀仏の脇侍が金剛手と観自在であつたとしたら、方角と中尊の印相及び三尊の構成が、脇侍が弘子を執る点を除いて、エローラ第十一窟下階中央祠堂の三尊と共通することになり、これが胎藏大日三尊でなく、阿弥陀三尊である可能性が生じていたかも知れません。つまり私が提唱する説が弱まってしまう虞があつたのです。

なおウダヤギリ第一遺跡における八大菩薩については、塔本四仏に割り振られた脇侍像以外にも作例があります。触地印或いは説法印釈迦牟尼坐像の左右に小像として表されたものや、観自在菩薩の両側に配置した像まであります。ラトナギリの場合と違い、総て二菩薩を台座の左右端に表しています。他の遺跡も含めて、様式がある程度共通しながら、胎藏大日の装身具の有無でも統一がなく、当地域に大きな工房があり各寺院が独自の形式で発注していたとい



図29 金剛手菩薩
コールカーター・インド博物館

うよりは、彫刻家が各寺院に属していた可能性が認められます。



図30 アパラジター
ラリタギリ遺跡収蔵庫

当地方には、もう一箇所発掘が進んだラリタギリという遺跡があります。ラトナギリにおいて学術的な発掘が実施される前のことです。装身具のない胎藏大日の作例が少なくとも二体出土しています。ここも先の二遺跡から遠くないものの、出土した彫刻の様式と形式に独自の特色が見られます。特に八大菩薩が、観自在・金剛手を他より大きくすることなく、同じ大きさの単独像の組み合わせとして少なくとも四組造られたことが確認出来ます。最も大きなもの（状態が良い二軀がコールカーターのインド博物館で展示され、残りは現地の収蔵庫で保管・展示されている）は、様式的に一番遅

い作で、像高が二メートルを優に超えています（図29）。傾斜地に造営された複数の僧院が発掘されていて、各僧院の仏殿において本尊の左右に祀られていたのが明らかです。またアパラジターの単独像（ラトナギリでは小像が出土）も残っています（図30）。

最後にアパラジターとの連関で、今回取り上げた場所と地域の一部、即ちマトゥラーとエローラ石窟及びオーデイシャー地方において、ヒンドゥー教シヴァ信仰の最も早く成立した宗派であるパーシュパタ（獸主）派が隆盛であったことを指摘して、胎藏曼荼羅に摂取された同派と係わるヒンドゥー教神格を取り上げたいと思います。まずヴィ

シヌ信仰の聖地に近いマトゥラーでは、二世紀初め頃にパーシユパタ派シヴァ信仰が確立し、三世紀にはドゥルガー信仰が盛んになり、シヴァ信仰と結び付いたと見られます。仏伝説話にアパラジターが取り入れられたのは、マトゥラーにおいて早くにドゥルガー信仰が発展したことが基盤にあったと推察されます。カラチュリ朝下のエローラ石窟においても、仏教窟の造営とほぼ同時期にヒンドゥー教窟の開鑿が行われ、その後も両宗教に属する石窟が造り続けられたので、マトゥラーの説一切有部との関係だけでなく、エローラ・ヒンドゥー教窟との係わりでもアパラジターの受容が進んだと思われます。

オーディシャー地方では、ヴィシヌ信仰と習合した土着神を祀るプーリのジャガンナート寺や太陽神に捧げられたコナラクのスーリア寺のようなシヴァ以外を主神とする大寺院があるものの、時代を超えて圧倒的にパーシユパタ派のシヴァ寺院が多く、例えば南に接するアーンドラ・プラデーシュ州のムカリンガムにまで、オーディシャー州のパーシユパタ派シヴァ信仰の文化が広がっています。これらの寺院において拝殿・本殿の外壁或いは入口を飾る彫刻主題が独自の発達を遂げ、多くの作例が認められます。善無畏所縁の《胎藏圖像》には、ラクリーシャ（パーシユパタ派の祖であるラクリンがシヴァと看做された姿）等のパーシユパタ派固有のヒンドゥー教神こそ見られないものの、この地域で成熟した方位神や天体神が「現図胎藏曼荼羅」に至るまで胎藏曼荼羅に導入されています。¹⁶「十二天」が成立したのも、このようなオーディシャー地方と東アジアの関係によると、私は最近考えています。サブタ・マートリカー（七母天）も特にパーシユパタ派と関係が深く、エローラ石窟では初期ヒンドゥー教窟以降盛んに造立されたものの、東アジアの胎藏曼荼羅に描かれる元になったのは、オーディシャー地方のヒンドゥー教彫刻と考えられます。私は、同地方に作例が現存しないものの、実際には仏教が受容したヒンドゥー教神格が布絵に描かれ運搬し易い形になって、唐代の中国に齎されたと考えています。従って、中国においては同地方の図像的特色だけでなく絵画様式の影響も受け、例えば東寺藏国宝《両界曼荼羅》（伝真言院曼荼羅・西院曼荼羅）のような作品が生まれたと、私は確信

しています。⁽¹⁷⁾

所定時間を超過して申し訳ありません。以上で私の講演を終わらせて戴きます。なお、この講演と基本的に同じ内容を圧縮し整理した拙稿が、中央公論美術出版刊『アジア仏教美術論集』『南アジアⅡ』に収録され、二〇二一年二月末までに出版されることを申し添えておきます。御清聴感謝致します。

参考文献

- 定金計次（一九九五）「インド美術の一貫性―彫刻・絵画に見られる主題と表現の特性―」『美學』（美術出版社）第一八三号、一一二頁
- （一九九八）「エローラ石窟における文殊菩薩圖像の展開（上）・（下）」『古代文化』（古代学協会）第五〇巻第六号、三〇四―四一頁、第七号、三三―四三頁
- （二〇〇二）「インド仏教石窟における金剛手菩薩の成立―説一切有部との関係を中心に―」、『西南アジア研究』（西南アジア研究会）第五七号、一三―四四頁
- （二〇〇六）『教王護國寺藏〈傳眞言院曼荼羅〉の再検討』、曾布川寛編『中國美術の圖像學』京都大學人文科學研究所、四一―四七二頁
- （二〇〇九）『アジャンター壁画の研究』（研究篇・図版篇二冊）中央公論美術出版
- （二〇一二）「東アジア伝承胎藏曼荼羅とインド美術」、津田徹英編『仏教美術論集2 圖像学―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、二五―四八頁
- 田中公明（二〇一二）「胎藏五仏の成立について―『大日経』の先行經典としての『文殊師利根本儀規経』―」、『密教圖像』（密教圖像学会）第三二号、八三―九五頁
- 森雅秀（二〇一七）『密教美術の圖像学』法蔵館
- 頼富本宏（一九九二）「インド現存の金胎融合要素」、『密教学研究』（大正大学）第二四号、一一三〇頁
- Bekson, Carmel. (1986) *The Caves at Aurangabad: Early Buddhist Tantric Art in India*, Ahmedabad: Mapin Publishing.

- Brancaccio, Pia. (2011) *The Buddhist Caves at Aurangabad: Transformations in Art and Religion*, Brill's Indological Library, Volume 34, Leiden: Brill.
- Burgess, James. (1878) *Report on the Antiquities in the Bidar and Aurangabad Districts*, Archaeological Survey of Western India, Vol. III, London: W. H. Allen.
- (1882) *Report on the Ellora Cave Temples and Brahmanical and Jainia Caves in Western India*, Archaeological Survey of Western India, Vol. V, London: Tribner & Co.
- Donaldson, Thomas Eugene. (2001) *Iconography of the Buddhist Sculpture of Orissa*, 2 vols., New Delhi: Indira Gandhi National Centre for the Arts and Abhinav Publications.
- Fergusson, James and James Burgess. (1880) *The Cave Temples of India*, London: W. H. Allen.
- Gupte, Ramesh Shankar. (1964) *Iconography of the Buddhist Sculpture (Caves) of Ellora*, Aurangabad: Marathwada University.
- Malandra, Geri H. (1993) *Unfolding a Mandala: The Buddhist Cave Temples at Ellora*, Albany: State University of New York Press.
- Mirashi, V. V. (1963) *Inscriptions of the Vakatakas*, Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol. V, Ootakamund: Government Epigraphist of India.
- Mitra, Devala. (1981-1983) *Ratnagiri 1958-61*, Memoires of Archaeological Survey of India, No. 80, 2 vols., New Delhi: Archaeological Survey of India.
- Schlinglof, Dieter. (1988) *Studies in the Ajanta Paintings, Identifications and Interpretations*, Delhi: Ajanta Publications.

註

- (1) 定金計次(二〇〇九)研究篇一七一―一七九頁参照。
- (2) Schlinglof (1988)において、一貫してアジャンター石窟に描かれた後期壁画主題と説一切有部の関係が強調されて、正しい指摘と評価出来る。しかしながら、第十七窟ヴェランダ左壁の「五趣生死輪」に関して、それとは矛盾した大衆部系の六道で解釈するという誤謬を犯している。

- (3) 定金計次 (二〇〇二)。
- (4) G. Yazdani, *Ajanta*, Part IV, London, 1955, pp. 114-118 参照。
- (5) Mirashi (1963), pp. 112-119.
- (6) 定金計次 (二〇〇九) 研究篇二八六—二八八頁参照。
- (7) 『國譯一切經』インド撰述部九一律部二十三 (大東出版社)、三七八—四〇四頁にチベット訳からの邦訳が収められている。
- (8) 定金計次 (一九九八) 上三五—三七頁。但し、目測のため像高が誤りで、実際には頭光頂から蓮華坐下まで九七センチメートル。
- (9) Gupta (1964) pp. 83 and 91; Malandra (1993) p. 26.
- (10) 定金計次 (一九九五) を参照。
- (11) 森雅秀 (二〇一七) 一一—一三七頁参照。
- (12) 頼富本宏 (一九九二)。
- (13) 田中公明 (二〇二二) においても、胎藏四仏として解釈されている。
- (14) Donaldson (2001) Vol. 2, figs. 28-30 参照。
- (15) Donaldson (2001) Vol. 2, fig. 129.
- (16) 定金計次 (二〇二二) を参照。
- (17) 定金計次 (二〇〇六) 四五—四五八頁参照。